

5

参加と保護の先頭に立つ子ども

思春期の青少年は、参加と保護のあいだの緊張関係という、すべての子どもが直面する問題の先頭に立たざるを得ない。彼らは、世界の後継者という立場にもっとも近い存在であり、おとなであることの利点と機会に接する次の年齢層でありながら、社会のこのうえなく醜悪な怠慢によって、もっとも危険にさらされやすい立場に置かれているのである。

近年の研究では、以下のようなことが確認されてきた。これは、思春期の青少年を対象として活動している者なら、経験上承知していることである。すなわち、家庭や学校とつながっているという感覚を強く持つことは青少年にとって有益であること。青少年は、緊密な人間関係を持ち、コミュニティのなかで価値を認められ、他人の役に立つ機会を得たときに成長すること。青少年は、おとなとの前向きな関係、安全な空間、貢献のために意味のある機会に高い価値を認めていること、などである³³⁾。

新しい力の発見

世界中の数百万人の女の子たちと同様、パキスタンの11~17歳の女の子、とくに低所得家庭の女の子たちは、社会や自分自身の成長に積極的に参加する機会を広範に否定されている。「女子プロジェクト」は、この10年間、家庭とコミュニティのなか

ユニセフ、YMCA、「アイランド・ピープル」の共催により、ポート・オブ・スペイン（トリニダードトバゴ）で開かれた会合「Xプレッション」。NGOに関わっている若者たちが世界中から集まり、若者たちにスキル、サービス、支えとなる環境を提供するために音楽、グラフィティ、ヒップホップ、ファッション、スポーツをどう活用するか、アイデアを出し合った。

で女の子たちをエンパワーすることにより、この問題に取り組んできた。このプロジェクトは、パキスタンの500の村々や市を対象としたものである。

女の子たちは、社会的意識を高めるための5日間のオリエンテーション・ワークショップに出席し、保健、衛生、栄養に関する実際的情報を学んで、それを家族全員のために活用する。若干でも正規の教育を受けたことのある女の子は、黒板、チョーク、模造紙を含む家庭学校キットを受け取る。多くの女の子は、教育を受けていない女の子たちのために、このキットでミニスクールを開設することが可能になるのである。そのことは、自分自身の自尊心を高め、ときには若干の収入になるというだけに留まらず、エンパワーメントをコミュニティに広げていくことにもつながる。救急訓練を受けたり、その他の所得創出スキルを学んだりすることにする女の子たちもいる。このプログラムがもっとも成果を収めている側面のひとつは、女の子たちが自分自身の能力と人生の新しい可能性を発見し、他の女の子たちのロールモデルとなって、女性の参加を阻む伝統的な障壁を打ち破るための長く困難なプロセスを開始したということである³⁴⁾。

「何年か前までは、私はぜんぜんこんなふうじゃなかった」と、20歳のスメラ・ザファールは語る。

「実際とても引っ込み思案で、ものすごく恥ずかしがりやだった。……でも、みんないまでは私の判断を信じてくれる。そこらじゅうの女の子たちが、いろんな問題を抱えて私のところにやってきて、家の中の深刻な問題を解決するのを助けて欲しいと頼んでくる。『女子教育プロジェクト』は、私みたいな女の子が自分自身を信じてることができるようになるのに、ほんとに役に立った。女であることは呪われた運命でも悪いことでもないんだと気づかせてくれた。自分自身を愛し、ありのままの自分に誇りを持つことを教えてくれた。いまでは、女も男と同じぐらいすごいんだって、本当に感じられるわ。……」

彼女から、パキスタンの女の子と女性たちに彼女なりのメッセージがある。「だれかに頼るのをやめて、自分自身を信じて。足場を固めて——自分の人生をより良いものにして、前に進んでいくためには、それしかないから」³⁵⁾

社会変革を勝ちとる

思春期の青少年たちが、同世代の行動に影響を及ぼすことによって社会的変革を勝ちとろうと試みている例は、世界中で枚挙にいとまがない。ユーゴスラビアのモンテネグロでは、ユニセフが支援して開かれたセミナーで、赤十字の若者ボランティアがピア・エデュケーション（同世代による教育・意識啓発）の訓練を受けた。ボランティアたちは、10代が直面する可能性がある諸問題を、革新的なロールプレイの手法を用いて演劇にする。取り上げるのは、セックスするかどうか、危険をとまなう行動にどのようにノーと言うか、HIV／エイズを含む性感染症から自分自身をどのように守るかといった問題である³⁶⁾。

10代のピア・エデュケーターは、アフリカ全土でもHIV／エイズとの闘いを繰り広げている。たとえばザンビアの若者に優しいクリニックは、演劇、詩、音楽、電子メディアを通じ、HIV／エイズ、その他の病気、妊娠などについてのもっとも重要な情報が伝えられる場所である³⁷⁾。ピア・リーダーはカメ

ルーンでも活動中であり、住居周辺の地図を作成して、危険をとまなう行動が起こる可能性のある場所（バー、ビデオルーム、陸軍兵舎など）がわかるようにするとともに、すでに存在する若者グループを見つけ出して、協力しながらHIV／エイズに関する意識啓発に取り組んでいる³⁸⁾。一方ナミビアでは、10代の妊娠の減少とHIV／エイズの予防を狙ったライフスキル・トレーニングを若者たちが進めており、これまでに、学校に行っているか行っていないかを問わず10万人の同世代にトレーニングを施してきた³⁹⁾。

思春期の青少年が他の若者の危険な行動にとりくむという考え方は、米国の一部地域でも興味深いかたちで実行に移されている。思春期の青少年が、同世代に対して裁判所で刑を言い渡す役割を担っているのである。このような「ティーン・コート」(10代の裁判所)では、8～18歳のボランティア(なかにはかつて罪を犯した者もいる)が弁護士、裁判官、陪審員として関わり、暴力犯罪以外の犯罪、交通違反または校則違反について同世代を裁こうと試みる⁴⁰⁾。このようなモデルは、ドイツや日本でも模索されているところである。

タイでは、「子どもと女性に対する暴力を終わらせるためのユース・キャンプ」の一環として、60人の若者がトレーニングを受けてボランティアになり、コミュニティにおけるドメスティック・バイオレンスの監視活動と、それをなくすためのキャンペーンを進める触媒の役割を果たした。このとりくみの結果、現在、ドメスティック・バイオレンスに関する国レベルの法律の見直しが進められている⁴¹⁾。

障害を持った人々は、幼児期だけでなく思春期においても、普通の日常生活パターンから排除されるのが当たり前という状況である。ベラルーシでは、ユニセフの支援により、障害を持った若者を社会に統合し、より自立した生活が送れるように訓練し、労働スキルを身につけられるようにするためのプログラムが実施されている⁴²⁾。イラン・イスラム共和

国では、ユニセフのプログラム立案プロセスに障害を持った子どもの見解や意見を包摂することが、3回のセミナーを通じて保障された。そのセミナーには、言語障害、聴覚障害、視覚障害、行動障害のある男女の子ども150人が全国から集まり、共通の

問題について話し合うとともに、役に立つ方策や活動を挙げた。それに加えて、イランによる子どもの権利条約批准記念日を祝うためのセミナーも、障害のある子どもたちの手で主催された⁴³⁾。

問題：おとなに搾取される子どもたち

思春期の青少年の可能性、彼らが前向きな成果を収めうる可能性を認めつつも、おとなの恥知らずな行動によって彼らが生命の危険にさらされる恐れが大きいことも、どうしても認識しておかなければならない。たとえば、強制労働や売春をさせるために子どもを人身売買すること、子どもを兵士として無理やり徴用することなどである。

1b子ども的人身売買は年間10億ドル規模のビジネスになっており、推定で120万人の子どもが毎年犠牲になっている⁴⁴⁾。

1b農業や家事労働で搾取することを目的とした子どもの人身売買が、近年、サハラ以南のアフリカで問題になってきている⁴⁵⁾。

1b買春目的の少女の人身売買は、東南アジアでは長年の懸念である。高い利益を持つ人身売買ネットワークに警察官、親族、国境警備官が関与し、それぞれが儲けの分け前にあずかっている可能性もある⁴⁶⁾。

1bモルドバ、ルーマニア、ウクライナから西ヨーロッパに売買されていく女の子の人数が急激に増えている。その仲介をしているのは、アルバニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、あるいはコンボ（ユーゴスラビア）に本拠地を置くギャング団である⁴⁷⁾。

1b推定30万人の子どもが、兵士、運搬要員、伝令、料理人あるいは性奴隷などとして、無理やり軍務に就かされていると考えられている。アフリカだけで12万人である⁴⁸⁾。

以上は極端な例だが、思春期の青少年はどんな社会でも、もっとも社会の周縁に追いやられ、虐待され、搾取され、ないがしろにされやすい年齢層を占める。保護したいという気持ちをおとなに抱かせるほど幼くはなく、おとなの社会の力と可能性を手にするほどには年齢がっていない青少年たちは、危険なほど無力な状態にもっとも置かれやすいのである。ほぼすべての国に、都市中心部の路上でかろうじて生計を立てている青少年が存在する。もっとも最近の推定では、このような子どもの数は1億人にもものほる⁴⁹⁾。彼らの多くは、仕事は路上でするけれども夜は家族のもとに帰る。しかし、保護と愛情に満ちた家庭など、はるか手の届かない子どももいる。安心して帰れる場所としての家庭を経験したことがない子どもも多い。家を離れ、路上に飛び出そうと決心する一番のきっかけが児童虐待であることも多いからである。

路上で生活する子ども、あるいは、ほとんどの生活時間をそこで費やす子どもは、どんな国でも、あらゆる面でいっそうの危険にさらされている。栄養不良やHIV感染から、地下の麻薬売買に引きずりこまれることまで、危険の内容はさまざまである。一部の都市では、彼らの生存そのものが毎日のように危険にさらされている。法律に触れるような生活をしているため、地元当局と衝突することが多くなるのも避けられない。多くの国で実施された研究では、このような子どもたちにもっとも強くしみこんでいる恐怖は、暴力的に殺されるのではないかという恐怖である⁵⁰⁾。

解決：組織化して身を守る子どもたち

ブラジルでは、都市の路上で生活している男女の子どもたちが、MNMMR（全国ストリート・ボー

イズ・アンド・ガールズ運動)に参加の場を見出した。この運動に参加することにより、子どもたちは自分たちの権利を知り、人生に対する見方を改め、権利のために闘うことができるようになったのである。1985年、地方グループの代表である思春期の青少年が出席して開かれた全国会議のあと、すでにストリート・チルドレンとともに活動していたエドゥケーター(教育活動家)によってこの運動は結成された。1986年には、全国の路上で生活している子どもたち約600人とストリート・エドゥケーターが会議を開き、運動の4大目標を次のように定めた。

1b 貧しい子どもを貧しいという理由で処罰する法律を変える

1b 暴力と闘う

1b もっと多くの男の子・女の子が参加できるよう、運動を支援・拡大する

1b エドゥケーターや活動家を訓練し、このような子どもたちとともに活動するのに必要な能力と適切

なアプローチを発達させる

運動は、以上を目標とし、2つの組織レベルを通じて、ネットワーク、相互支援および教育手法を強化するために設置された。2つの組織レベルとは、æ, 地方・州レベルのエドゥケーターおよび全国調整担当者と、æ,, 「ヌクレオス・デ・バセ」(基本的核)に参加し、自治体・州・国レベルで会合を開く男女の子どもたちのグループである。全国会議は3年ごとに開かれており、2002年には同国の首都ブラジリアに男女の子どもたち1,000人以上が集まった。

この運動は、国レベルの法改正にも重要な影響を及ぼしてきている。1988年には、ブラジルが25年の軍事独裁政治から脱するのを期して改正されたブラジル憲法に、子どもの権利条約を凝縮した規定を置くことに成功した。1990年子ども・青少年法の制定につながった議論にも、積極的に参加した。もうひとつの活動戦線では、ストリート・チルドレンの抹殺者集団を非難するうえでも主導的な役割を果たしてきた。

路上で時間を過ごしてきた男の子・女の子たちは、運動に参加することを通じ、家庭やコミュニティの生活に復帰すること、学校に行くこと、自分の権利のために闘える自分自身の空間を利用することを学んだのである。

「さまざまな協力関係が必要であり、とくに子どもたち自身の協力を求める」

子どもの生存、保護および発達に関する世界宣言(1990年)

アフガニスタンの家庭。11歳の写真家サビーナのカメラに、3人の子どもたちがまっすぐな視線を向ける。他の家族は食事に集中している。

パネル 5

国づくり

子どもたちは世界中で、自分たちに影響を与える法改正の問題について声をあげるようになってきている。そして多くの国では、政府も耳を傾けるようになりつつある。

子どもジルガ

アフガニスタンでは、子どもジルガ（議会）が、同国の子どもたち数百万人が直面している困難な状況にとりくもうとしている。親の一方または双方を失った子ども、紛争のために避難を余儀なくされた子ども、地雷で障害を負った子ども、栄養不良に苦しむ子ども、5歳の誕生日を迎える前に死んでしまう子どもなどである。アフガニスタン政府は、保健省や教育省など複数の省庁が参加する、子どものための国家委員会を設置するよう要請を受けてきた。「そうすることによって——」と、子どもと武力紛争に関する国連事務総長特別代表のオララ・オトゥヌは説明する。「政策づくりや資源配分の際、子どもたちが中心に置かれるようにするのです」

若い国

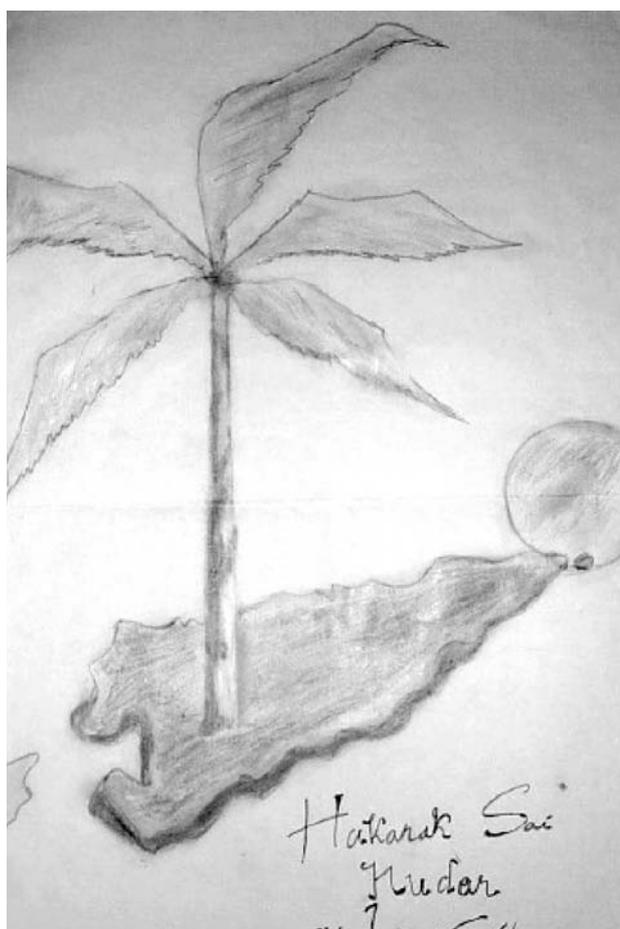
東ティモールでは、独立が祝われた2002年5月20日の9日前に学生議会が開催され、議会議事堂で開会式を執り行った。新しい国が独立に向けて動いていくなかで、ユニセフはそのパートナーとともに精力的なキャンペーンを展開し、若者たち向けの民主主義教育を実施していた。「子どもや若

ティモールのココナツヤシは新しい若木を伸ばし始めたばかりである。「これから、この木には曲がってほしくない。まっすぐな木に育って、均等に影を伸ばして、傾いたり、他の木から光をさえぎったりしない木になってほしい」
ジレス・ソアレス（18歳）

"Through the Eyes of the Children", UNICEF, Timor-Leste.

者とともに国造りを」という標語のもと、ユニセフは若者が政治的プロセスに参加するよう奨励した。このキャンペーンから学生議会が誕生したのである。

学生たちは、ヘルスケアから教育、HIV／エイズに至る広範な問題について話し合い、22項目の決議を採択した。彼らは新政府に対し、子どもの権利条約を含む人権文書を批准すること、農村部での保健・教育を向上させることを求めた。





© Fabian/Alamy - your photos will mean my case / ICT/2002

学生議会は、セルジオ・ヴィエイラ・デメロ国連暫定行政機構代表の諮問機関である憲法制定議会が最高機関だった東ティモールで、初めて開かれた議会である。国民によって選ばれたシャナナ・グスマン大統領は、閣僚評議会とともに、学生議会の9日後にデメロ氏から統治権限を引き継いだ。学生議会の報告書は、正式な議会に対し、2002年の会期中に提出される予定である。ユニセフは教育省と調整を図りながら、2002年度中にいくつかの高校に学生議会を設置する予定にしている。

「子どもたちは東ティモールにとって大切です」と、学生議会議長のゲルmano・ダコスタは言う。「この国は若い国だし、僕たちは若者です。家を建てたり食べ物を栽培できたりするのもいいけど、子どもたちの力を伸ばしていかないといいけません。子どもたちが、僕たちにとって未来の保障なんです」

参加のチャンス

世界の別の場所に目を向けると、南アフリカ法律委員会(SALC)が、子どもに関わるすべての法律の包括的見直しに携わっている。見直し作業は1990年代に始まった。アパルトヘイトが終焉し、最初の民主選挙が行われた1994年以前にさかのぼる子どもケア法制について、不満が広がっていたためである。

1996年と1999年に緊急の改正がいくつか行われたあと、

現在では現行法の全面的・徹底的見直しが進められている。全国の子どもたちがワークショップやディスカッション・グループに参加し、子どもたちのコメントは、同委員会が2001年に予備的勧告を作成したときに考慮にいれられた。その後、子ども法案が完成し、現在は社会開発省預かりのかたちになっている。承認されれば、法案は議会に提出される予定である。

SALCは、子どもたちに直接の影響を与える法律の緊急改正について子どもたちと協議し、子どもたちがおとなと同等の立場で法改正プロセスに参加できるようにした。子どもたちの意見は他の利害関係者のそれと同等に考慮され、いくつかの例では子どもたちの意見が決定的なものとなった。そのひとつの例は、16歳未満の子どもの雇用を禁止する規定を18歳未満のすべての子どもに拡大することを見送るという決定である。

子ども参加プロセスの第三者評価では、法改正プロセスに参加し、自分たちの声を聴いてもらう機会が保障されたことを、子どもたちが高く評価していることが明らかになった。ある子どもの言葉を借りれば、次のとおりである。「私たちは意見が言えたり、必要にされている、大事にされていると感じることができた。参加して、自分たちの考えを話して、聴いてもらうチャンスを与えられたのも嬉しかった。私たちの発言から、何か役に立つものを見つけてくれればと思う」